



帰り道の旅

こもり
小森
かおり
香折

家に帰る道が、うまく見つからないときがある。

わたしはもう四年生だから、道に迷うわけじゃない。交差点を渡って、二階に歯医者さんがあるビルを曲がって、スーパーに続く道をだらだらと下がっていけば、わたしの家。

だけどいつもの道を歩いて、あたりまえみたいに家に帰りたくない時があるのだ。そんな時、わたしは旅にでる。いつもとはちがう道を歩いて、コンビニに入ってお菓子の棚をながめたり、駅ビルでさらにさらしたものが並んでいるお店へいく。

べつに、ほしいものがあるからじゃない。ただそうして、かわいくて、にぎやかで、家にはないものをながめていると、すこしだけ気持ちがおさまるのだ。

それでもだめなときは、土手へでて夕陽を見る。空が苦しいほどきれいな色に染まって、おひさまが川むこうの街に沈んでいくのを見る。しつかりと、終わりまで見る。

「マオちゃんは家に帰るのがいやなの？」と、エリカちゃん言う。

「そういうわけじゃないけど」

先生に「栗原さんの通学路で、いちばん危険なところはどこ？」ってきかれたときも、わたしはうまく答えられなかった。「おはよう」おじさんの動かない目とか、ゴミをあさる大きなカラスとか思いだしていたから。

うまく言えそうにないから、わたしは「特にありません」って答えた。そうしたら、先生はひどく不機嫌になった。

「二丁目の交差点を通るじゃないの。あそこがいちばんあぶないでしょう！ それとも、栗原さんは空を飛んで帰るの？」

いいえ先生。わたしは空を飛んで帰りません。わたしの背中には、羽じゃなくてランドセルだから。

もちろん、わたしはそんなふうに答えない。みんなが笑うのにあわせて、照れくさそうに口もとをゆるめるだけ。ほんとうに言いたかった言葉はわたしの中にもつていく。雪みたいに。しんと。

ランドセルを背負った、飛べないわたし。鳥たちは、まっすぐにねぐらへ帰っていく。あの子たちはいいな。迷うことがなくて。

だれにも、わたしのころはわからない。いちばんきれいなのは、「あなたの考えていることはわかっているのよ」って思ってる、無神経なおとなたち。

わたしのことがわかっているのは、たぶんあの樹だけ。クリーニング屋さんの横できゅうくつそうにしている、いっぽんの桜の樹。わたしの樹。

わたしの樹は電線をさけて、身をよじるようにして枝をつきだしている。排気ガスのせいで、ひどく具合が悪そうだ。花が散ってしまったら、誰にも見むきもされない。

「なにか問題でもあるの？ 親が離婚しそうだとか」

問題。そう、なにか問題があれば、説明するのはかんたんだ。エリカちゃんがさぐるようにわたしを見ているので、わたしはもったいぶって「うん、ちよつとね」と言ってみる。ため息をそえて

「ふうん。でもあぶないんだよ、寄り道すると。おかしなひとがたふさんいるんだから」

だけど通学路を歩いてたつて、おかしなひとはいる。火曜日と木曜日の朝に駐車場のわきですれちがうおじさん。通りすがりに「おはよう」って声をかけてくる。

あいさつされるだけなんだから、「おはようございます」って返事するのが礼儀なのかもしれない。でもわたしは、あまつたらい声で「おはよう」って声をかけてくるあのおじさんがきれい。こわいし、気持ちがいい。べつになにもされていないし、「おはよう」って言われるだけなんだけれど、あの「おはよう」がきれい。こすつてもとれない泥をなすりつけられるみたいで。

でも自分の気持ちをひとに伝えるのって、むずかしい。とっても。



酒井 駒子／絵



樹はただ、そこにいるだけ。そして目ではないものでわたしを見て。「やあ、また旅をしたんだね」と樹は言う。「うん、旅はいい」。

樹の言葉がわたしのからだにしみる。いいにおいの風みたいな言葉。

秋になると、木の葉は大切なことを伝えるように落ちてくる。まだらに染まった葉っぱが頭のうえに落ちてきたとき、わたしは頭をなでられたみたいでどきりとした。

ホットケーキにかける琥珀色のメイプルシロップが楓の樹液だっ
て知ったとき、わたしは桜の樹にもあまい樹液が流れているにち
がいないって思った。濃いサクランボみたいな味がする、ルビー色の
樹液。

わたしのなかに流れているのが、さびた鉄のにおいがする血な
んかじゃなくて、あまい紅色の樹液だったらよかったのに。相手を
うかがいながら言葉をえらぶかわりに、梢を風にゆらすだけで、
すべてを語れたらよかったのに。

ときどき、ここにふりつもった言葉が、からだからあふれそう
になる。

らんぼうで有名な、とがった顔をした男の子がいる。ヨシカワ
くん。わたしとエリカちゃんは、ランドセルを傘でたたかたこと
がある。傘はべとべとと汚れていて、ランドセルにきたない痕を
残した。

ヨシカワくんは傘をふりまわして、わたしたちの頭もたたいた。
わたしはたたかたことなんてなかったから、びっくりして泣く
こともできなかった。

「このことは秘密にしておこうね」って約束したのに、エリカ
ちゃんはすぐお母さんにしゃべった。だからエリカちゃんのお母さ
んがつぎの日に学校にやってきて、先生たちをすごい勢いでどなり
つけた。

廊下に立たされていたヨシカワくんは、ひどくちいさく見えた。
きつとヨシカワくんのからだにも、しめった雪みたいな言葉がぐ
じゅぐじゅにつまっているんだらう。

わたしはきょうも、帰り道をさがす旅をする。その気になれ
ば、土手をどこまでも歩いて遠くへいってしまうことだってでき
る。そう気がついたとき、わたしはもうこどもじゃなくなったん
だと思う。

わたしの樹は、いつもの場所に立っている。夕陽をあび、幹は
ほんのりとぬくもっている。枝のすきまから見える空は迷路み
たいだ。

根っこをコンクリートで固められているから、わたしの樹は動け
ない。コンクリートがひび割れるほど根を起こして、樹はどこへ帰
ろうとしているんだらう？ いつか空を飛んで、まっすぐに、いつ
も満開の花を咲かせていられる場所をめざすんだらうか。

そのとき、きつと空は紫と紅色がかさなつて金色に輝いている
だらう。

わたしもいつしよに空を飛ぼう。いつの日か。わたしの樹と、しつ
かりと抱きあつて。

小森 香折（こもり かおり）

児童文学作家。東京都生まれ。『ニコルの塔』で第5回ち
うでん児童文学賞大賞、第22回新美南吉児童文学賞最優秀賞。
近著『うしろの正面』が『さくら』で『読書』などでネコ
がいるの。『びっくりたま』はか多数。